

■ 3月の新刊案内

● 出版メディアパル No.23

電子出版学入門

— 出版メディアのデジタル化
と紙の本のゆくえ —

湯浅 俊彦 著

「出版＝紙」がこれまでの常識でした。私たちがふだん見られている本や雑誌は紙に印刷され、製本され、私たちはそれを好きなきに読むことができます。書店に行くと紙の本や雑誌がまさに山のように積み、私たちはその中から好きな本を探して、買うことができます。

また図書館に行くと書店では置いていないような古い時代に刊行された本や雑誌でも手にとってみるのが可能です。

ところがいつの頃からか「出版＝紙」とも限らない状況が出現してきました。

例えばCD-ROMという形態で発行された辞典が登場し、パソコンで検索するといった使い方が可能になりました。

また「電子ブック」や、電子辞書と呼ばれる情報家電製品



も発売されました。さらにインターネットの普及によって、パソコンで古典的な文学作品を無料で読むことができたり、電子書籍やデジタル雑誌と呼ばれる商品を購入できたりするようになりました。

そして今日ではいつでもどこでもケータイやスマートフォンで小説やマンガを読み、写真集を見ることができるようになったのです。

このような出版の世界に起こった変化について考えるのが、この本の目的です。

デジタル化とネットワーク化を特徴とする今日のメディア社会の中であって、出版の変化は私たちに何をもちこたえようとし

ているのでしょうか。

そこでこの本では「電子出版学とはなにか」「電子出版の歴史」「さまざまなネット情報源」「ケータイ読書の進展」「電子出版物の生産・流通・利用」「電子出版の諸問題」「新ビジネスチャンスと図書館の近未来」の7章に分けて、このような電子出版の世界について調べていくことにしました。

電子出版とはいったいどういうものであり、どのような歴史をもち、どのようなしくみになっているのか。

電子出版の出現によって紙の本や雑誌はなくなってしまうのか。著者や読者、出版社や書店はいったいどうなっていくのか。そして人類の知識の伝承や保存はどうなってしまうのか。

そのことを考えるためにこの本が役に立つことができたら本当にうれしく思います。

2013年3月

湯浅 俊彦

発売予定：3月上旬

A5判・144ページ

定価：本体価格 1,500円＋税

<編集室だより>

出版メディアパル編集長 下村昭夫

立命館大学文学部・教授の湯浅俊彦さんの活動は幅広い。日本出版学会理事、日本ペンクラブ言論表現委員会副委員長などと出版研究や言論の自由を守るために活動する一方、国立国会図書館・納本制度審議会委員として「電子出版とデジタル・アーカイブ」の最前線で活躍しておられる。

著書に『デジタル時代の出版メディア』『日本の出版流通における書誌情報・物流情報のデジタル化とその歴史的意義』などがあり、見識の幅広さを物語っている。

本書は、2009年に「初版」、2010年に「改訂2版」を発行したが、めまぐるしく動く最新の電子出版の状況と産業データを一新し「改訂3版」とした。出版現場で、日夜、情報のデジタル化や電子書籍の編集で苦勞されている編集者の皆さんに、お読みいただければ幸いである。